

# エドモンド・ウィルソンとロシア

## ーレーニンからナボコフまでー

佐藤 清人

### I はじめに

アメリカの文芸批評家エドモンド・ウィルソンが残した業績を一瞥すれば、彼の関心の広さを窺い知ることができる。ウィルソンは欧米の文学のみならず、社会的・政治的な問題にも広く言及している。そうしたウィルソンの批評活動のなかで顕著なことは、ロシアに関する言及が多いことである。1930年代には「マルクス主義」の研究のためにロシアを訪問し、さらにロシア文学を原文で読むためにロシア語を学びさえしたウィルソンのロシアに対する関心の深さには並々ならぬものを感じられる。じじつ、「マルクス主義」の研究は『フィンランド駅』へという作品に結実したのであり、ロシア文学への傾倒はプーシキンの礼賛と、さらにはウラジーミル・ナボコフの『エヴゲーニイ・オネーギン』訳をめぐる大論争へとつながったのであった。

批評家エドモンド・ウィルソンはいかにしてかくもロシア＝ソ連に強い関心をいだいたのであろうか。また、ウィルソンが表象するロシアとはいかなるものであったのだろうか。本稿では、彼の著作を通して浮かび上がるウィルソンとロシアとの関係について論述してみたい。

### II ロシアへの旅

ウィルソンがそもそもロシア文学に興味を持つようになったのは、プリンストン大学で教えを受けたクリスチャン・ゴウス教授の影響らしい。ウィルソンはゴウスがトルストイの小説に言及しつつ、ロシア文学を賛美していたことを覚えている。ウィルソン自身、そうした時期にトルストイやドストエフスキーの作品に親しんだのであった。しかし、ウィルソンのロシア文学に対する関心は即座に形あるものに実を結んだわけではなかった。初期の代表的批評書『アクセルの城』において、ウィルソンはフランスの象徴主義文学について論じたが、ロシア文学まで言及することはなかったからである。

ウィルソンのロシアへの関心は文学から始まったが、それは一気に社会的・政治的方面へと移動することになった。その原因は1929年にアメリカを襲った大恐慌であった。1929年10月のニューヨーク株式市場の暴落を契機にはじまった世界的な大恐慌はアメリカ社会に大きな打撃を与え、大量の失業者を産み出した。失業と貧困に苦しむ労働者は、労働組合を通じてデモ行進をはじめ労働条件改善のためにさまざまな活動を行った。こうした1930年代の不況にあえぐ労働者の姿をウィルソンは当時のエッセイの中で記述しており、彼は共産党員にこそならなかったものの、共産主義の思想には大きな関心を寄せることとなった。そして1935年の5

月から10月まで、ウィルソンはグッゲンハイム財団の奨学金を得て共産主義について研究するためにロシア（ソヴィエト連邦）を訪問したのであった。

ところで、ロシア訪問中ウィルソンは猩紅熱に罹り、入院するという不運に見舞われた。その時の様子を「ソヴィエト・ロシア-オデッサで罹った猩紅熱」というエッセイのなかに記述しているので、そこで描かれるウィルソンのロシアの印象を見てみよう。

猩紅熱に罹ったウィルソンはオデッサ（現ウクライナ）にある伝染病院に入院させられたが、彼はその病院の不衛生について繰り返し言及している。ベッドについたナンキンムシにはじまり、以下のような記述でそれは極まる。

前に述べたように、病院は恐ろしく汚かった。ロシア人の衛生観念がいかに低いかはじめて認識したのは、公衆衛生がもっとも必要なのに新任者がまだ改革にそれほど熱心でない場所の状態を目撃したときであった。たとえば、われわれの病室の洗面台は水は出るものの、洗顔、食器洗い、うがい、排尿に使用されていたのだ。年輩の医師の一人が痰を吐いたが、蛇口をひねって流もしないのを見たことがある。トイレは便座がなく、ドアもない。病院の職員は清潔を保つように努力しているのだが、患者たちは、ロシアでは例によって、たいてい汚し放題なのだ。

（“The hospital, as I have said, was terribly dirty. I never realized how extremely low the Russian standard of cleanliness had been till I saw the conditions which were tolerated in one of the places where sanitation was most necessary but where the new broom had not yet swept clean. The wash-basin in our room, for example, though it did have running water, was used for face-washing, dish-washing, gargling, and emptying urine; and once I saw one of the older doctors spit into it without bothering to turn on the faucet. The toilet had no seat and no way of fastening the door, and, though the hospital people tried to keep it in order, the patients, as is usual in Russia, generally left it in a mess.”）

ウィルソンがロシアの公共施設に見たものは上記の引用に見られるように、決して先進国のそれではなく、むしろ発展途上国のそれであった。一方、ロシアの人々に対する印象はどうであったろうか。

病院で看護してくれた二人の看護婦たちについてウィルソンは次のように言う。「二人は正反対のタイプだったが、ともにあくまでロシア人らしかった。片方はいつも快活で、もう片方はいつも沈みがちで、ともにあの深いあきらめの境地に達していて、何ごとに対しても無感動であった。」（“They were two opposite types, but both very Russian; one was always cheerful and the other was always sad, but both had that deep resignation, that incapacity for being surprised.”）こうした言葉から、ウィルソンは「あきらめ」や「無感動」をロシア人らしい特徴と見なしていたことが窺われる。

ウィルソンは他の人物からも同じような印象を受けている。ウィルソンを診察する年老いた医師が付き添い人

たちに診察室の家具を片づけるよう命じたときの様子を、彼はこう描写している。

それから、芝居がかった低くて大きな声で、付添人たちに家具を片づけるように命令したが、「同士」と呼びかけながらも、その調子にはいつも命令している人間の尊大で有無を言わせぬものがあった。彼らはもちろん何もしないで突っ立っていたが、これはロシア人がすぐに行動することを要求されたときにありがちなことだ。

（“Then, in a deep loud theatrical voice, he told the attendants to clear out the furniture, addressing them as *“továrishchy,”* but in the magistral peremptory tones of one who has always commanded. They stood, of course, without doing anything, as Russians are likely to do when confronted with a demand for immediate action . . . .”）

ここではロシア人の行動の鈍さ、あるいは融通の利かなくなさが指摘されている。このように、ロシア人に対してウィルソンがいだいた一般的なイメージは「諦念」、「無感動」、「鈍重」など否定的な性質によって色づけされている。しかし、ロシア人のイメージが常に否定的というわけではない。病院の婦長に関する次のような記述は、まったく正反対の人間性を示している。

婦長はふつうの看護婦とはまったく違った。はるかに精力的かつ積極的で、また、はるかに恰幅がよくて背が高かった。その姿は「醜い公爵夫人」にやや似ていたが、ちょっとした願いごとをしたときなど、彼女の傲慢な、あるいは、憤慨した表情は崩れてやさしい、ユーモアに満ちた表情に変わるのだった。性格のせいで思わず寛大な衝動に走るときに英雄的な姿となって現れる、あのロシア人特有の人間性を備えていた。

（“The Head Nurse was a different matter. She was a much more energetic and positive person, and she was also much bulkier and taller. She looked a little like the Ugly Duchess, but her expression of haughtiness or indignation would melt into tenderness or humor when the slightest appeal was made to her. She had that ready humanity of Russians which, when character backs the generous impulse, may take such heroic forms; . . . .”）

二人の看護婦と婦長がウィルソンの目にまったく正反対な存在として映ったその原因は、彼女たちの個人的な性格や資質の相違ではない。共産党員であるか否かがそうした違いを決定づけるのである。そしてまさしく婦長は共産党員であった。

病院で、わたしは誰が共産党員で誰がそうでないかを徐々に知るにつれて、片や共産党員とその仲

間、片やその他のロシア人たちとのあいだの関係について以前にまして明確な概念をもつようになった。共産党員とはすべての責任を引き受ける人たちのことである、とオデッサでは思われたのだ。(中略) 彼らだけがものわかった、能率的で、時代遅れでない人びとであるように思われたからだ。何かをしてもらいたいときには、共産党員のところに行かねばならない。わたしは彼らが他のロシア人に仕事をさせるためにたえず骨を折っていることに同情できるようになった。

“In the hospital, as I gradually came to find out who were and who were not Communists, I got a much clearer notion than I had had before of the relations between the Communists and their followers, on the one hand, and the rest of the Russian community, on the other. The communists, it was plain to me in Odessa, were the people who took all the responsibility. . . . they [Communists] seemed to be the only people who are sensible, efficient and up-to-date. If you really wanted to get anything done, you had to go to a Communist about it. I came to sympathize with their constant trials in making the other Russians get things done.”)

こうした記述から、ウィルソンのロシア人に対するイメージは、共産党員であるロシア人と共産党員ではないロシア人との二つに分かれていたと推察することができる。共産党員であるロシア人は責任感が強く、能率的にてきぱきと行動するのに対して、共産党員ではないロシア人は心が空疎で、行動がのろい。しかし、こうしたロシア人に対するウィルソンのイメージはその後も一貫して持続するわけではない。むしろ、ロシアへの旅において感じられた一過性のものにすぎない。

### III 『フィンランド駅へ』-レーニン

ウィルソンは1940年に『フィンランド駅へ』という書物を出版した。この本は3つのパートから成り、第一部では、フランス革命について書いたミシュレ、第二部ではマルクスとエンゲルス、第三部ではレーニンとトロツキーを中心にして社会主義あるいはマルクス主義の歴史的展開をたどっている。前章で述べたロシア旅行も本書を執筆するためのものであった。

『フィンランド駅へ』はこのようにマルクス主義の展開を歴史的に俯瞰するというじつに壮大な構想のもとに書かれた本であるが、ベルリンの壁の崩壊、ソヴィエト連邦の崩壊を目の当たりにした現代人の目から見ると、その評価は難しい。第一に、この本のなかには、とりわけレーニンという人物をめぐる明らかな事実誤認が含まれているからだ。

この点に関しては、本書が1972年に出版されたとき、新たに付した序文のなかでウィルソン自身認めているところである。ウィルソンは序文の冒頭で次のように弁明している。

われわれは新生ロシアが、旧ロシアにおける多くの要素---検閲、秘密警察、無能な官僚の引き起こ

す厄介な問題、強大で残忍きわまる独裁---を依然とどめることになろうとは予想だにできなかった。本書全体をつうじてわたしは、重要な進歩があり根本的な「解決」がなされたことを、そしてわれわれの歴史はけっして同じものにはならないことを当然のこととしていた。わたしは、ソヴィエト連邦が人類史上もっとも恐るべき独裁国家となり、スターリンが無慈悲な歴代の独裁者のうちでもっとも残酷で良心を欠いた独裁者になるなどは考えてもみななかった。それゆえ本書は、革命家たちが「より良き世界」を築くためにやっていると思ったことについての、基本的に信頼できる記述として読まれるべきである。

（“We did not foresee that the new Russia must contain a good deal of the old Russia: censorship, secret police, the entanglements of bureaucratic incompetence, an all-powerful and brutal autocracy. This book of mine assumes throughout that an important step in progress has been made, that a fundamental “break-through” had occurred, that nothing in our human history would ever be the same again. I had no premonition that the Soviet Union was to become one of the merciless Russian tsars. This book should therefore be read as a basically reliable account of what the revolutionists thought they were doing in the interests of “a better world.”）

ウィルソンはこの後、フランスの社会主義の伝統を過小評価しているとの批判を真摯に受けとめているが、マルクスとエンゲルスについてはあえて付け加えるべきことは何もないと言い、自分の記述の正当性について自信のほどを窺わせている。

一方、レーニンについては、「わたしはまた、あまりにも友好的なレーニン像を描いているという批判を受けた。これはある点では、正当な批判であることは否めない」（“I have also been charged with having given a much too amiable picture of Lenin, and I believe that this criticism has been made not without some justification.”）としながらも、「しかし、わたしが本書を執筆している時点で入手できた資料は、ソヴィエト政府によって正式に認可され、脚色されたものだった」（“But at the time that I wrote I had almost nothing to go on except the accounts which had been authorized by the Soviet government and had been stage-managed in the sense it approved.”）と弁明している。その後、ウィルソンは、自らが提示したレーニン像をくつがえす新たに彼が知るところとなった証言のいくつかを引用している。

ウィルソンは『フィンランド駅へ』の記述が正確さを欠いていることを率直に認めながらも、あえて書き直すことはしなかった。われわれはこの本をいかに評価すべきだろうか。むろん社会主義とマルクス主義の正当な歴史書として読むことはできない。

岡本正明はこの点について、三つの可能性を提示している。まず第一番目は「メタヒストリー」として読むことである。本書に登場する人々はミシュレからトロツキーまで多かれ少なかれ歴史家であり、彼らの歴史に関する記述を分析したウィルソンの記述は「歴史家の歴史記述の歴史」、すなわち「メタヒストリー」というわけである。

岡本が掲げる二番目の可能性は革命家たちの「英雄伝」として読むことである。『フィンランド駅へ』のなかには「社会主義思想」にとりつかれた人間たちのドラマが描かれている。社会主義のイデオロギーは衰退もしくは崩壊しているが、社会主義をめぐる人々のドラマは永遠であると、岡本は言う。

さらに3番目として、『フィンランド駅へ』はマルクス、エンゲルスを多義的なテキストとして読む批評書とみなす可能性を岡本は示唆している。つまり、ウィルソンはマルクスとエンゲルスのテキストをイデオロギー的に捉えるだけではなく、マルクスのテキストを風刺文学として、また、エンゲルスのテキストを百科全書として捉えてもいるのである。

こうした『フィンランド駅へ』に対する岡本の読み方は、どれ一つをとりあげても作品全体に当てはまるわけではないが、「英雄伝」として読む方法は、とりわけレーニンに関する部分を読む場合には有効かもしれない。ただし、人物の描き方に偏りがあることを十分承知しておかなければならないけれども。

ウィルソンが描いたレーニン像は、真実からはかなり隔たったものであった。そうした理由によって、『フィンランド駅へ』を誤謬に満ちた悪書として退けることも可能である。一方、レーニンの真実が広く知れ渡った今日、『フィンランド駅へ』に書かれたレーニンの姿を真実と見まがう読者も少ないであろう。『フィンランド駅へ』のレーニンはレーニンの実像ではなく、ウィルソンが産み出したドラマの主人公なのだと考えれば、むしろウィルソンが1930年代当時、社会主義に込めた情熱の大きさがわれわれ読者には伝わってくるのではあるまいか。

#### IV プーシキン

先述したように、ウィルソンのロシアに対する関心は文学からはじまった。トルストイ、ドストエフスキー、チェーホフなどロシア文学の代表的な作家をウィルソンは高く評価している。そうしたなかで、とりわけウィルソンが高く評価したのがプーシキンであり、彼の代表作『エヴゲーニイ・オネーギン』であった。

プーシキンの没後100年目にあたる1937年にウィルソンは「プーシキン礼賛」という文章を書いている。タイトル通り、この文章のなかには、ウィルソンのプーシキンに対する賛美の言葉が連ねられている。ここではウィルソンの文章を丹念にたどりながら、ウィルソンのこれほどまでのプーシキンへの礼賛の本質は何か、という問題を考えてみたい。

まず、冒頭の記述を引用しよう。

自国の文学作品に対して外国人が書いた批評を読むと、それがどれほど丹念に調べられたものであれ、凡庸だったり間違いだらけなのがわかってしまうものである。筆者のごときロシア文学の初学者の場合には、そうした危険性はとりわけ大きいから、たまたま本論を目にしたロシア人読者から見れば、あちらこちらで誤謬を犯していることは免れないだろう。しかし、今年ソヴィエトで生誕100年が祝われているプーシキンは、一般に英語圏の国ではあまりにも評価されていないので、その重要性を英語圏読者に伝えようとするわたしの稚拙な試みもお許しいただけるのではなからうかと思う。

“Anyone who has read criticism by foreigners, even well-informed criticism, of the literature of his own country knows what a large part of it is likely to be made up of either banalities or errors. In the case of a novice at Russian like the writer, this danger is particularly great; and I shall probably be guilty of many sins in the eyes of Russian readers who should happen to see this essay. But Pushkin, the hundredth anniversary of whose death is being celebrated this year by the Soviets, has in general been so little appreciated in the English-speaking countries that I may, perhaps, be pardoned for however imperfect an attempt to bring his importance home to English-speaking readers.”)

ここに見られるウィルソンの自己卑下といってもよいほどの謙遜した態度はなぜだろうか。ウィルソンは英米の作家のみならず、フローベールのようなフランスの作家、カフカのようなドイツの作家、つまり英語以外の言語で書いた作家も批評しているが、そこではこのような謙遜した態度を取って示すことはない。ウィルソンのフランス語やドイツ語の能力がどの程度であったかは定かではないが、ロシア語に対しては、やはりこうした控え目な態度をとらねばならぬほどに自信がなかったのであろう。

ところで、ウィルソンはこのあと、欧米の文人がロシア文学、とりわけプーシキンをないがしろにしてきたことを糾弾する一方、ロシア文学におけるプーシキンの位置をフランス文学におけるヴォルテール、イタリア文学におけるダンテになぞらえている。けだし、ロシア文学の父と称されるプーシキンに対して正当な評価をしたものといえよう。

しかし一方、ウィルソンはロシア語で書かれたプーシキンの作品を翻訳することの困難さを指摘し、翻訳で読んだ場合には、作品が無味なものになってしまうと述べている。ロシア語を解する者が少ないことを考えれば、欧米におけるプーシキンの過小評価もやむを得ないということになるだろうか。したがって、プーシキンを軽視していることについて欧米の批評家に向けたウィルソンの批判は、逆に、彼が彼らに対して過大な要求をしているとも解されるのである。翻訳では失われるものが多く、原文でなければその作品の真価を味わえないとすれば、欧米の読者にとって、プーシキンを理解することは絶望的であるように思われる。

『エヴゲーニイ・オネーギン』はよくバイロンの『ドン・ジュアン』と比較される。ウィルソンもここでプーシキンの作品をバイロンの作品と比較し、プーシキンのバイロンに対する優位、卓越さを繰り返し説いている。また、キーツやジェーン・オースチン、フローベールやスタンダールにもなぞらえて、プーシキンを賛美しているが、こうした文人たちとの比較から産み出される賛美の本質は必ずしも明確ではない。

しかし、『エヴゲーニイ・オネーギン』の物語の梗概を語りおえた後に書かれた次のような記述は注目に値する。

プーシキンは、三人の中心的登場人物の關係に、いろいろな含みを持たせている。ある意味で、この三人は当時の三つの知的風潮を表していると言ってもよい。エヴゲーニイは世俗化して無味乾燥になったパイロニズム。シラーやゲーテに心酔するレンスキイはドイツ・ロマン派的觀念主義、そし

てタチヤーナは、ロマン派の詩の中に現れつつあった、新しい言葉を語り新しい権利を主張する、ルソーの自然観である。そしてまた別の観点から見れば、この三人はロシアそのものにおける異なった傾向を代表している。エヴゲーニイとレンスキイは半分異邦人であり、西洋文化に基づいたものの考え方をするが、生涯を古い封建的領地で暮らしてきたタチヤーナは、プーシキンにとっては本当のロシアなのである。

（“Pushkin has put into the relations between his three central characters a number of implications. In one sense, they may be said to represent three intellectual currents of the time: Evgeni is Byronism turning worldly and dry; Lensky, with his Schiller and Kant, German romantic idealism; Tatyana, that Rousseauist Nature which was making itself heard in romantic poetry, speaking a new language and asserting a new kind of rights. And from another point of view they represent different tendencies in Russia itself: both Evgeni and Lensky are half foreigners, they think in terms of the cultures of the West, whereas Tatyana, who has spent her whole life on the wild old feudal estate, is for Pushkin the real Russia.”）

ウィルソンはエヴゲーニイよりもタチヤーナこそこの物語詩の主人公と考えているように見える。じじつ、次のような言葉はそれを裏付けている。

『エヴゲーニイ・オネーギン』でいちばん悲惨なのは、エヴゲーニイの悔恨でもなければレンスキイの死でもなく、エヴゲーニイがそこから逃れようとしたし、タチヤーナがかつても今もよそ者の思いを感じている、あの空虚で非道な社交界の世界に、タチヤーナがすっかり巻き込まれてしまったということなのである。

（“For, after all, the chief disaster of *Evgeni Onegin* is not Evgeni’s chagrin or Lensky’s death: it is that Tatyana should have been caught up irrevocably by that empty and tyrannical social world from which Evgeni had tried to escape and which she had felt and still feels so alien.”）

ウィルソンはタチヤーナを、後の時代にロシア革命をもたらす人々の象徴と見なしている。それはこの文章を締めくくる最後の言葉から明らかとなる。

だが、ダンテがイタリア語に対して行ったことをロシア語に対して行い、ロシア小説の基礎を築きあげたプーシキンは、タチヤーナの生まれ持った人間性とエヴゲーニイの社会的価値観を対置することで、ロシアの芸術および思想全般にわたって展開されることになる主題を設定し、それに独特の



力を与えた。トルストイ同様、レーニンの出現は、まさしくこの対比が鋭く感得されるような国においてのみ可能だったのである。プーシキンが決定的な言葉とともに置き去りにしたタチヤーナは、実のところその先も勝利者として生き続けるのだ。

（“Yet Pushkin, who had done for the Russian language what Dante had done for Italian and who laid the foundations of Russian fiction, had, in opposing the natural humanity of Tatyana to the social values of Evgeni, set a theme which was to be developed through the whole of Russian art and thought, and to give it its peculiar power. Lenin, like Tolstoy, could only have been possible in a world where this contrast was acutely felt. Tatyana, left by Pushkin with the last word, was actually to remain triumphant.”）

ウィルソンがプーシキンを礼賛する理由は、何よりもその詩の言語である。しかし、そうした審美的な要素だけが賛美の理由ではなかった。明らかに、そこには政治的な要素も含まれていたのだ。『プーシキン礼賛』が書かれた1937年当時、ウィルソンが『フィンランド駅へ』執筆のためにレーニン像を構想していたことはすでに見たとおりである。レーニンを讃えるのと同じ歴史観がプーシキン礼賛の根底にも横たわっていたのである。

## V ナボコフ

1940年、ちょうどウィルソンが『フィンランド駅へ』を出版した年、彼はロシアから逃れてきたある亡命作家と知り合った。『ロリータ』で知られるウラジーミル・ナボコフがその人である。ウィルソンとナボコフの関係はその後約20年にわたって続いた。二人の関係がどのようなものであったかは、ウィルソンの死後出版された往復書簡集のなかで窺い知ることができる。はじめはお互いに手紙の冒頭には相手のファミリー・ネームを記したが、手紙の遣り取りがはじまって1年もたたないうちに、相手のファースト・ネームで呼び合う仲となった。しかもそれはやがてウィルソンの場合には「バニー」、ナボコフの場合には「ヴォロージャ」というような愛称による呼び名へと転じ、二人の親密さはより一層深まったのであった。文学という共通な関心事によって結ばれていたとはいえ、20年もの間、二人の文学者が手紙を交換し続けた例は希有であろう。

ところで、ナボコフがそもそもウィルソンの知己を得るようになった経緯は多分に打算的な要素があった。文筆活動で生計を立てねばならないナボコフが未知の国アメリカで何のつてもなく自分の作品を出版することは困難であった。出版界に顔のきく人物の知遇を得る必要があったのである。じっさい、手紙のなかで明らかのように、ナボコフはウィルソンに自分の作品を出版する機会を与えてくれるよう依頼し、またウィルソンはそれに応えている。

しかし、ウィルソンとナボコフの関係がたんに打算の上に成り立っていたわけではないことも明らかである。二人はお互いに文人としての相手の才能を認め合っており、相手の知らない作家について紹介し合って、相互に影響を与え続けたのであった。また、ロシア語の勉強をしていたウィルソンは、とりわけロシア語の詩の韻律に

ついて、ナボコフから多くの教示を得た。また、逆にウィルソンがナボコフに英語の言い回しについて助言を与えることもしばしばであった。

一方、このようにお互いに影響を与え合ったウィルソンとナボコフの二人ではあったが、彼らのものの考え方、趣味・嗜好が常に一致していたわけではなかった。それらが食い違い、衝突することもたびたびあった。些細なぶつかり合いは夥しいが、特筆すべき意見の対立は、『フィンランド駅へ』におけるレーニン像とプーシキンの詩をめぐるそれである。

ナボコフは刊行間もない『フィンランド駅へ』を読み、その感想をウィルソン宛ての手紙で述べている。ナボコフは『フィンランド駅へ』を「とても楽しく読めたし、構成もみごとで、あなたの偏見のなさにはおどろくほど」(“I enjoyed it immensely, it is beautifully composed, and you are extraordinarily unbiased”) であると誉めてはいるが、その後いくつかの難点を挙げている。そしてレーニンに関してはこう述べている。

彼の息子 [レーニン] に関しては・・・いや、いかにあなたの文章魔術をもってしても私がレーニンを好きになることはないし、あなたが忠実かつ致命的に準拠している公式の伝記を私は何年も前に読んだことがあります (あなたがアルダーノフの『レーニン』を読んでいなかったのは残念)。

(“As to his son [Lenin] . . . No, not even the magic of your style has made me like him, and I have read years ago the official biographies you have faithfully and fatally followed (what a pity you have not dipped into Aldanov’s *Lenin*).”)

ロシア革命の様子を間近で目撃し、その後亡命せざるを得なかったナボコフの目からすれば、ウィルソンのレーニン像が真実からかけ離れたものであることは一目瞭然であった。先に見たように、1972年にはウィルソンもさすがに自分の誤りをみとめないわけにはいかなかったが、このときのウィルソンはナボコフ宛ての返信で次のように述べている。

ロシアの背景にわたしが疎いことには気づいていました。しかし、レーニンおよび革命家としての彼の全体像についてあなたの理解は間違っているように思います---彼のことを怪物と考え、人間的な観点から説明しようとしなからず。

(“I was aware of the weakness of my Russian background. I do feel, though, that you are mistaken in your conception of Lenin and the whole type of revolutionary personality which he represents—because you conceive a monster and don’t explain him in human terms.”)

さらにこの後、ナボコフがウィルソンに宛てた手紙では、ナボコフは前の書簡でいささかウィルソンを非難すぎたと感じたのか、取り繕うように「あなたのロシアの背景にはどこにもおかしいところはありません」(“there

was nothing wrong about your Russian background”）、また、「あなたがある観点を取るかぎりにおいて、雰囲気の様子は申し分ありません」（“insofar as you adopted a certain point of view, your rendering of the atmosphere is perfect”）と述べ、たんにウィルソンが使用した資料とは異なる他の資料を使ってみてはどうかと述べたにすぎないと言いつつしている。まだ二人の交際が始まったばかりで、率直にお互いの考えをぶつけ合うまでに二人の関係が親密になっていなかったため、ナボコフは遠慮せざるを得なかったようである。こののち、手紙のなかでレーニンをめぐって議論を交わすことはないが、レーニンに関する二人の考え方には、根本的な相違があったように思われる。それを知ればこそ、その後そうした話題に言及することをあえて避けたのかもしれない。

ウィルソンとナボコフの間で生じたもうひとつの大きな衝突は、ナボコフによるプーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』の英訳をめぐってである。前に述べたように、ウィルソンは『エヴゲーニイ・オネーギン』を高く評価していた。一方、作家プーシキンあるいは作品『エヴゲーニイ・オネーギン』に対するナボコフの評価も同様であり、この点に関してはむしろ両者の意見は一致していた。ところが、1965年にナボコフが詳細な注釈を付けて英訳した『エヴゲーニイ・オネーギン』を、ウィルソンが雑誌に載せた書評なかで酷評したことから事態は急変した。ナボコフはそれに反駁する論文を別の雑誌に掲載し、二人の対立がはじまったのである。

ウィルソンとナボコフの対立において、いずれの側に分があるかは、筆者のようにロシア語の知識をまったく持ち合わせていない者には不可能である。よって、ここでは、ここでは議論の正当性や妥当性よりもウィルソンの批評の特質についていくつか見ておきたい。

ウィルソンはまず冒頭で次のように述べている。

ナボコフ氏は取りかかっているこの種の仕事を紹介する時には、自分が唯一無二の適任者で、他にこれを試みた人はすべてとんまで無知であり、語学や学問の専門家として無能であることを公言する癖があり、その人が下層階級の出で馬鹿げた人物でもあるとほめかすこともしょっちゅうなので、書評子が、彼の文学的非礼をまねるつもりはないが、弱点をためらうことなく指摘したとしてもナボコフは不平を言うべきではない。

（“Since Mr. Nabokov is in the habit of introducing any job of this kind which he undertakes by an announcement that he is unique and incomparable and that everybody else who has attempted it is an oaf and an ignoramus, incompetent as a linguist and scholar, usually with the implication that he is also a low-class person and a ridiculous personality, Nabokov ought not to complain if the reviewer, though trying not to imitate Nabokov’s bad literary manners, does not hesitate to underline his weaknesses.”）

ナボコフが他人の欠点を悪し様に言う癖はウィルソンへの書簡のなかでもたびたび見られ、ウィルソンはこうしたナボコフの習慣に常々辟易していたように思われる。ウィルソンはこの批評の他の箇所でも、「ナボコフ氏は

謙虚な人柄からはほど遠い人であるので、わたしはためらうことなく彼に対抗して自分の意見を主張したい  
("Since Mr. Nabokov is the least modest of men, I do not hesitate to urge my own rival claims against him")  
と述べている。

ウィルソンが行ったナボコフ訳の批判は、訳それ自体への批判であることは間違いないが、そうした批判をする動機のなかには、ナボコフの人格に対する批判を行うことが多分に含まれていたように思われる。『エヴゲーニイ・オネーギン』の英訳には、ナボコフ訳より以前にウォルター・アルント訳があったが、ナボコフは公然とアルント訳を非難している。しかるに、ウィルソンはナボコフ訳よりもアルント訳の方が優れている箇所をいくつか指摘している。ウィルソンがアルント訳を持ち上げたのも、ナボコフに酷評されたアルントへの同情からと思われる。

一方、ウィルソンは具体的な例を挙げてナボコフ訳を批判している。しかも、ウィルソン自身がかつて「プーシキン礼賛」を執筆するさい、『エヴゲーニイ・オネーギン』の一部を訳した箇所を引き合いに出して、自分の訳の方がナボコフ訳よりも優れていると主張しているのだ。ウィルソンがいかにもロシア語に造詣が深かったとはいえ、ロシア語を母語とするナボコフよりもロシア語に通じていたとは思われない。また、それはウィルソン自身自覚していたであろう。こうしたウィルソンの自信に満ちた主張は、ロシア語に対する自信というよりはむしろナボコフを叩きのめしたいという欲望から生まれてきたものに違いない。

ウィルソンはナボコフとの交友からロシア語について、とりわけロシアの詩の韻律について学ぶことが多かったが、ロシアそのものについて学ぶことは少なかったようだ。それを妨げたのは、ある意味でナボコフが祖国ロシアを捨て、そこから逃れてきた亡命者であったことが一因であっただろう。しかし、それ以上に、ナボコフ個人が持つ強烈な個性がその大きな要因であったように思われる。

## VI 冷戦中のロシア

これまで見てきたように、第二次大戦以前におけるウィルソンのロシアに対する印象はおおむね肯定的であり、レーニンやプーシキンの詩に対するように、ときには心からの賞賛を贈る場合さえあった。しかし、第二次大戦後、アメリカ合衆国とソヴィエト連邦が冷戦を続けるさなかにあつて、ウィルソンはロシアをどのように見ていたのだろうか。ウィルソンは1956年に「ロシア」と題するエッセイを書いている。ここではその文章を手がかりに、冷戦中におけるウィルソンのロシア観がいかなるものであったか考察してみよう。

ウィルソンは、次のような文章でそのエッセイをはじめている。

ソヴィエト・ロシアの庶民を撮影したカルティエ＝ブレッソンのみごとな写真集も…進歩という点から…見ると、すっかり憂鬱になってくる。モスクワの街頭に佇む男女は、二十年前わたしがそこにいたときから少しも変わっていないのだ。相変わらず、無頓着で発育不良のぶかっこうな体つきで、身なりもちっともかまわないひどいものである。相変わらず途方に暮れ、自信がなく、自分の住む社会を掌握して自分たちの生活の方向づけに何らかの役割を演じているという意識がほとんどない。あ

るロシア夫人も、彼女は一九三五年にわたしがモスクワに滞在したときそこにおいて、その後アメリカ人と結婚してアメリカにやってきたのだが、これらの写真からまったく同じ印象を受けたと語った。まったく落胆したという。

（“The fine photographs by Cartier-Bresson of the ordinary people in Soviet Russia I found, in their implications---from the point of view of progress---extremely depressing. The men and women on the streets of Moscow seemed not to have changed in the least since I had been there twenty years before. They looked just as amorphous, stunted, badly cared-for and badly dressed. They appeared just as much at sea, just as lacking in self-assurance, just as little as if they had any grip on the society in which they lived, any share in the direction of their lives. A Russian woman who had been in Moscow when I was there in 1935 but who married an American and came to America has told me that these photographs have made upon her exactly the same impression: she had felt, she said, a sad discouragement.”）

ロシア革命によって高等教育を備えたロシア貴族は追放され、スターリンの粛清の結果、インテリの革命家たちも抹殺され、あとには農民しか残らなかった。そうした農民は、本来ならば、「歴史的役割」を担うはずであったが、昔のように文盲ではないにしても、現代の知的文化に触れることは制限されているために、引用文にあるような状況がしゅったいしたのだとウィルソンは説明している。ウィルソンは、レーニンが掲げた理想は今も否定していないが、その後のスターリンの独裁政治のおかげで今のロシアが存在しているとの認識を示している。

さて、このようにウィルソンは共産主義の理念と現実のギャップのなかでロシアの現状を捉える一方、ソヴィエト連邦とアメリカ合衆国を比較して、両者に類似性もしくは共通点を発見している。ウィルソンは「合衆国とソ連はヨーロッパ諸国にない特徴を共有している。巨大国家、開拓者精神、うち解けた友好的態度、多民族によって構成される連邦組織、あらゆる基準を「庶民」のレベルに合わせる傾向がそうである。」（“the Soviet Union and the United States do have certain things in common which they do not have in common with Europe: the big country, the pioneering, the fraternal informal manners, the federation of varied peoples, the tendency to settle standards on the level of the ‘common man’”）と述べている。さらに合衆国におけるマッカーシズムがロシアの粛清と同等であること、さらにロシアの隠蔽主義が合衆国においても見られることを、『アメリカの横顔』という書物に掲載予定であった写真に上院委員会がクレームをつけたことや、1955年にソ連の農業専門家の一団が合衆国を訪問したさい、ロシアと同じような大規模農業経営を行っていることを知られないために、代表団には小規模の農場しか見せなかったことを挙げながら、指摘している。合衆国とソ連が表面的には対極にあると思われた冷戦の時代に、あえて両国の共通点に着目したウィルソンの炯眼は注目に値する。一見、ロシアの特異性と見られるものが、自国アメリカにもあることにウィルソンは気づいていた。ウィルソンはアメリカを絶対視することなく、ロシアと同様に相対化して眺めていた。そうしたウィルソンの冷静な眼差しが、冷戦中にあっても、ロシアに対する関心を失わせることがなかったのに相違ない。

## VII おわりに

エドマンド・ウィルソンほど生涯にわたってロシアに関心を持ち続けたアメリカの文学者はいない。何がそれほどまでにウィルソンをロシアに惹きつけたのであろうか。ウィルソンのロシアへの関心は主に二つの領域に分けることができる。社会的・政治的領域と文学的領域の二つである。前者における関心は『フィンランド駅へ』という書物に結実したわけだが、そこにはマルクス主義・共産主義の理念に対する深い共感があった。後にウィルソンはレーニンという人物の描き方に誤りもしくは無理解があったことを認めているが、レーニンが抱いていたと思われる理念については、その正当性を翻すことはなかった。1929年の世界恐慌を目の当たりにし、労働者の惨状を目撃したウィルソンは、共産主義の理念に対して生涯変わらぬ信頼をおいていたようである。

一方、文学的領域、とりわけプーシキンへの関心と賛美は何からもたらされたのであろうか。ウィルソンはプーシキンを原文で読みたいがために、ロシア語の勉強をはじめた。しかし、ナボコフとの往復書簡からもわかるように、ウィルソンのロシア語の能力は本人が思うほどには優れたものではなかった。とりわけロシア語の韻律を理解することは困難であった。にもかかわらず、ウィルソンはナボコフのプーシキン訳を徹底的にこきおろすようなことをやってのけている。ナボコフのプーシキン訳を正當に評価するには、ロシア語と英語の両方に対して優れた能力をもっていることが必要とされる。英語に関してはウィルソンに分があり、ロシア語に関してはナボコフの方に分があることを踏まえれば、ウィルソンの批判を全面的に正しいとみなすことは不可能である。ここでもまたレーニンの実像に迫れなかったように、ウィルソンは翻訳がもつ現実的な困難さに直面できなかったのではあるまいか。何かの理念に衝き動かされていたのかもしれないが、それがいったいいかなる理念であったかは、いまだに不明である。

一方、ウィルソンのプーシキン礼賛がどこから生まれてきたのかは定かではないが、逆にそれがもたらしたものは明らかである。サイモン・カーリンスキーが指摘しているように、ウィルソンがプーシキンを「発見」する以前、アメリカにおいてロシア文学はチェーホフからはじまっていたのであり、ロシア文学の父と称されるプーシキンの姿はなかった。しかし、ウィルソンによって、プーシキンは掘り起こされ、本来居るべき場所に位置付けられたのであった。ときにはアメリカの作家とみなされるほどになったナボコフを、今日の名声にまで引き上げるのに果たしたウィルソンの役割は大きい。それと同じように、ときにはただの大喧嘩ともみなされるプーシキン訳をめぐるウィルソンとナボコフの論争も、プーシキンの名声を高らしめるのに大いに貢献したと思われる。

### 《参考文献》

Karlinsky, Simon. Ed. *Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov-Wilson Letters, 1940-1971*. Berkley: U of California P, 1979.

Muchnic, Helen. "Edmund Wilson's Russian Involvement." In *An Edmund Wilson Celebration*. Ed. John Wain. Oxford: Phaidon, 1978.

Nabokov, Vladimir. *Strong Opinions*. New York: McGraw-Hill, 1973.

Wilson, Edmund. *A Piece of My Mind: Reflections at Sixty*. New York: Farrar, Strauss and Cudahy, 1956.

Wilson, Edmund. *A Window on Russia*. New York: Farrar, Strauss and Giroux. 1943.

Wilson, Edmund. *Red, Black, Blond and Olive: Studies in Four Civilizations: Zuñi, Haiti, Soviet Russia, Israel*. London: W. H. Allen, 1956.

Wilson, Edmund. *The Triple Thinkers*. 1938; New York: Octagon Books, 1977.

Wilson, Edmund. *To the Finland Station: A Study in the Writing and Acting of History*. 1940; New York: Farrar, Strauss and Giroux, 1972.

エドモンド・ウィルソン『フィンランド駅へ - 革命の世紀の群像 上・下』（みすず書房、1999年）

サイモン・カーリンスキー（編）、中村紘一・若島正（訳）『ナボコフ＝ウィルソン往復書簡集1940-1971』（作品者、2004年）

「特集 エドモンド・ウィルソン」『英語青年』（研究社、2001年6月）

中村紘一・佐々木徹（訳）『エドモンド・ウィルソン批評集1 社会・文明』（みすず書房、2005年）

中村紘一・佐々木徹・若島正（訳）『エドモンド・ウィルソン批評集2 文学』（みすず書房、2005年）